

男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その4）

-男たちの「反応/表出困難性 response impossible & inexpressiveness」についての考察-

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity (4) Men can't express their feelings: Response impossible

國友万裕（同志社大学）／中村正（立命館大学）

Kazuhiro Kunitomo (Doshisha University) / Tadashi Nakamura (Ritsumeikan University)

Key words: 男性性、ジェンダー、応答困難性 / masculinity, gender, response impossible

問題意識と基本的課題の設定

ジェンダー社会における女性の被抑圧的地位に由来する被害は、フェミニズムの視点から社会的に認知されているが、同じように男性に関わる諸困難についての認識が同じ程度になされているとはいえないし、その必要性についてさえ懐疑的な論者もいる。そのため、男性が何らかのジェンダー関連の被害、不利益もしくは臨床的ニーズを訴えると、当人の意識や行動の特性に帰責されてしまい、社会的な位相において認識をすることが困難になり、ますます、当事者を追いつめることになる。問題の隠蔽・否認、自己責任化等という諸点において二次的加害の様相をジェンダー作用は男性に屈折した様相においてもたらす。とりわけ、女性が加害者である場合、男性本人が男性優位主義的意識をもつことも奏功し、女性の些細な言動に傷つき易いのだという解釈をされる場合もある。つまり、被害や要支援的ニーズを認められないばかりか、女性の被害者性を看過し、マクロな抑圧を無視する者として指弾されることもある。しかし、「男性・加害者/女性・被害者」と割り切れるほどに問題は単純ではない。むしろ、被害待性を訴えることができないことが、男性の最大の不利益な部分と言える。男性問題のフェーズをきちんと取り出し、ジェンダー社会における臨床的課題の視野を広げることになる事例分析を行う。ようやくではあるが少年の被害（とくに性的被害や母性による抑圧等）についてはその沈黙化作用も含めて視野に入りつつあるが、男性のライフサイクルの諸相において、そのミクロとマクロの双方からジェンダー作用と影響について考察することはこれからの課題となっているという問題意識のもと、男性性作用の帰結としての表出性の諸困難を相互作用における対人関係や社会的応答の感情的行動的なコミュニケーション困難を応答不可能性 response impossible として把握するためのエピソードを収集して考察を加えることとする。

方法と分析：エピソードの男性性研究による構造化

被害体験のある男性のライフストーリーのエピソードの分析を行う。ある男性の経験をもとにした主観的には否定的な体験の相互作用の機微を一つずつ紐解いていくミクロから仰ぎ見る男性性ジェンダー作用をみていくことをとおして、男性性体験のスペクトラムの広がりを読み解きたいと思う。以下のように、ある男性の男性性ジェンダー違和感のエピソード記述にかかわるナラティブ構成をとおして以下のように分析を加えていく。

①微視的な攻撃行動 micro aggression（中学くらいから、女子に「気持ち悪い」と言われ続ける。深く傷つくが、それに対して、どう対抗していいのかわからない）。②モビング行動（女子は、無意識に女性であることの意味を活用している。弱者・被害者の権力。弱者が群れること＝モビングで強者である男性を傷つけようとする。筆者らはモラルハラスメントのひとつのパターンとして位置づけている）。③メタフレームの攪乱（いじめ行動のひとつ。対象となった男子をクラス委員にすることで面白がろうとする女子たちの集団による投票の結果、まつりあげられ、公辱化される。彼女たちは、

「私たちは彼がクラス委員にふさわしいと思っているから選んだのよ」というメタフレームで先生に対抗する。いじめがメタフレームに言及することで反論できなくなる。いじめを「これは遊びである」とメタフレーム上の攪乱で処理することであり、「これはメパイブではない」（フーコー/マグリット）という超現実の構築となり、明らかに悪意でしておきながら、これは「悪意」ではないというフレームを用いること）。④男性が感情を表出することの困難さ（男性学研究者のダン・カイリーは男性の対人関係上のシナリオはドジかマッチョかホモになる事だと指摘。また筆者らはここに暴力もしくは沈黙も加えている。映画でもしばしば描かれるようにマッチョな男性は、女性を殴ることはできないため、通りがかりの男に暴力をふるい怒りを発散する。さらにその一部をクラウン主義ともいって、マッチョにもホモにもなれない男がピエロ役＝ドジを演じて、自分を笑うしかない事態も散見されると筆者らは位置づけている。さらに男性蔑視の三大要素であるハゲ、デブ、チビなどの言葉の暴力を笑いとばすしんどさや沈黙・寡黙・引きこもりもある。ドジにもマッチョにもゲイにもなれない男子は、黙って我慢し、自分のなかに引きこもっていくことがある）。⑤男性同士のトラブル化（男性同士の暴力が典型的）。⑥異性がジェンダープレッシャーを与える（男性にとって女性はオーディエンスであり、女性の前ではカッコよく見せたり、強がったりしなくてはならないというプレッシャーが生まれる。ゆがんだジェンダー意識の発達もあり、ここから童貞問題やスポーツ問題も同型的となる）。さらに今後の展望として、⑦「ゲイじゃない！ Not Gay!」応答（解決策としては、ゲイ的なライフスタイルをとりこみ、男同士の親密さや男の表出性を発達させることのように思える）がある。これは男性性の多様化をめざすこととかわる動向なのでその様相も紹介する。

考察

男性性の傷つき（被害待性や脆弱性）に敏感な男性性ジェンダー論にとって有効な概念としての表出困難さは失感情症的な意識や態度として指摘されてきたがそれを男性性のジレンマとしてのレスポンス・インポシビリティとして構成できる。

参考文献

- ダン・カイリー『ピーターパン・シンドローム』（祥伝社）
國友万裕『BL時代の男子学』（近代映画社）
中村正「男性性・男性問題をめぐる臨床社会学・親密な関係性研究に焦点づけて」『立命館産業社会論集』第50巻第1号、2014年
Paul Nathanson and Katherine K. Young, *Spreading Misandry*, McGill Queen's University Press, 2006
Jane Ward, *Not Gay*, New York University Press, 2015